

報道関係者 各位

奥能登国際芸術祭2020+ 最涯の芸術祭、美術の最先端。
**会期、「珠洲の大蔵ざらえ」プロジェクトに
おける劇場型民俗博物館の名称を決定**

石川県珠洲市を舞台に2021年秋に開催される「奥能登国際芸術祭2020+」の会期について、本日開催した令和2年度奥能登国際芸術祭実行委員会第3回総会にて、正式に2021年9月4日～10月24日の51日間に決定しました。

また、「珠洲の大蔵ざらえ」プロジェクトとして会期に合わせて公開する劇場型民俗博物館の名称や、参加アーティストが1名追加決定しましたので、お知らせいたします。

ニュース1

「珠洲の大蔵ざらえ」プロジェクト
劇場型民俗博物館「スズ・シアター・ミュージアム」に名称決定

「珠洲の大蔵ざらえ」プロジェクトの作品（会場：旧西部小学校体育館）である、劇場型民俗博物館「スズ・シアター・ミュージアム」の開館に向け、キュレーションで作家の南条嘉毅を中心とした展示制作がはじまります。

これまで「大蔵ざらえ」によって珠洲市内のお宅65軒から1500点を超える民具を収集しました。その一部を活用し、光や映像を使った、物が主役の、かつてない劇場型民俗博物館が誕生します。

なお、「スズ・シアター・ミュージアム」は、地域文化を核とした博物館として、芸術祭の会期終了後も市内外の方々との交流を創出する常設型アート作品として活用する予定です。



◆「珠洲の大蔵ざらえ」プロジェクトとは・・・

珠洲市の高齢化率が50%を超え、空き家や高齢者世帯が増えています。その家庭に受け継がれてきた歴史や祭りなどの文化を感じられる大切なものが、各家庭の蔵や納屋に眠ったまま、行き場を失おうとしています。

このプロジェクトでは、地域住民、サポーター、民俗学・人類学の専門家、アーティストが協働し、珠洲市内の各家庭に眠る農具や漁具、工芸品や祭礼の道具など、眠ったままの“地域の宝”を使い手の記憶や思い出とともに市内一円から集め、その膨大な資料を丁寧に読み解き、保存するもの、活用するもの等に整理・分類していきます。それは、物を主役にした、収蔵とアートが共存する、かつてない劇場型民俗博物館の誕生です。海を見渡せる丘に建つ旧西部小学校体育館が本館となり、やがて市内一円に分館を展開するプロジェクトです。

キュレーション：南条嘉毅（アーティスト）

参加アーティスト：大川友希、OBI、久野彩子、世界土協会、
竹中美幸、南条嘉毅、橋本雅也、三宅砂織

民俗文化学アドバイザー：川村清志（国立歴史民俗博物館准教授）

改修設計：山岸綾（建築家）

映像記録：映像ワークショップ



珠洲市内から集まった民具
(唐箕、脱穀機、榊、赤御膳、火鉢、
キリコ(切り灯籠)等々)

取材・広報についてのお問い合わせ

奥能登国際芸術祭実行委員会事務局 担当：灰庭、小菅
〒927-1214 石川県珠洲市飯田町13部120番地1(珠洲市奥能登国際芸術祭推進室内)
TEL：0768-82-7720 FAX：0768-82-7727 E-mail：press@oku-noto.jp
公式WEBサイト oku-noto.jp
Facebook https://www.facebook.com/okunotojp
Twitter https://twitter.com/okunotojp
instagram https://www.instagram.com/okunotojp



参加アーティスト追加（2021年3月25日時点）

新たに作家1名の参加が決定し、2021年3月25日時点での参加作家は、16の国と地域から48組となりました。

NEW

四方 謙一（日本）

1983年京都生まれ。早稲田大学芸術学校建築設計科卒業。幾何学や素材の特性によって構成されるパターンに周囲の環境を取り込み彫刻や写真などを制作している。主な作品や展覧会に、「Flowing time reflecting on the river」(RAYARD MIYASHITA PARK/東京)、collecting view in the well」(第28回UBEビエンナーレ/宇部)、「GLOWING GROWING GROUND」(大阪国際空港)などがある。



collecting view in the well
制作年:2019年

○これまでに参加決定していた作家（2020年9月25日時点）

青木野枝(日本)、浅葉克己(日本)、カルロス・アモラレス(メキシコ)、石川直樹(日本)、磯辺行久(日本)、今尾拓真(日本)、シモン・ヴェガ(エルサルバドル)、大岩オスカル(ブラジル)、大川友希(日本)、尾花賢一(日本)、OBI(日本)、金沢美術工芸大学アートプロジェクトチーム [スズプロ](日本)、金氏徹平(日本)、上黒丸(日本)、キジマ真紀(日本)、キムスージャ(韓国)、久野彩子(日本)、スボード・グプタ(インド)、佐藤貢(日本)、さわひらき(日本/イギリス)、サイモン・スターリング(イギリス)、デイヴィッド・スプリグス(カナダ)、世界土協会(日本/シンガポール)、竹中美幸(日本)、田中信行(日本)、カン・タムラ(アメリカ/日本)、陳思[チエン・シー](中国)、郭達麟[デュラン・カク](香港)、涂維政[トゥ・ウェイチェン](台湾)、中島伽耶子(日本)、中谷ミチコ(日本)、南条嘉毅(日本)、カールステン・ニコライ(ドイツ)、Noto Aemono Project(日本)、橋本雅也(日本)、蓮沼昌宏(日本)、原広司(日本)、クレア・ヒーリー&ショーン・コーデイロ(オーストラリア)、ひびのこづえ(日本)、フェルナンド・フォグリノ(ウルグアイ)、アレクサンドル・ポノマリョフ(ロシア)、三宅砂織(日本)、村上慧(日本)、ムン・キョンウォン&チョン・ジュンホ(韓国)、盛圭太(日本)、山本基(日本)、力五山(日本)

(表記は五十音順)

※各アーティストのこれまでの作品介绍も含めたプロフィールは、以下のURLからご覧いただけます。

<https://oku-noto.jp/artists/>

「奥能登国際芸術祭2020+」開催概要

会期	2021年9月4日(土) - 10月24日(日) 51日間
会場	石川県珠洲市全域
主催	奥能登国際芸術祭実行委員会
実行委員長	泉谷満寿裕(珠洲市長)
総合ディレクター	北川フラム(アートディレクター)
参加アーティスト	16の国と地域から48組(2021年3月25日時点) ※別紙参照



第4弾参加アーティストプロフィール（2020年9月25日時点）



Close yet far

大川 友希（日本）

2012年愛知県立芸術大学/彫刻専攻卒業。物に残る記憶や時間、思い出の断片を掘り下げ、繋げて、新たな時間のかたちとして再構成した立体作品やインスタレーション作品を制作。2013年天明屋尚プロデュースによるTENGAIGALLERYにて個展。その後も、個展開催や企画展に参加。2018年NYにて古着を集め、滞在制作と展覧会を開催。最近では、古着を用いたWSや建築家/湊健雄と共に依頼者の古着で家具を作り替えるプロジェクトにも力を入れている。

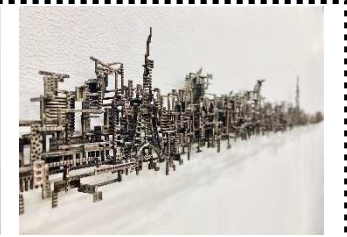


《月の夜を見る》2018年

OBI（日本）

美術・建築・映像によって組織されたアートユニット。フィールドワークを通して身近な環境における不透明な存在や素材にスポットを当て、文化と社会を結ぶ芸術活動を行う。

【沿革・活動】2020年つきのよと上映会。'19年フランス・オルレアン-新潟市南区交流事業。'18年六甲ミーツアート芸術散歩グランプリ受賞。'17年水と土の芸術祭月潟アートプロジェクト、同年合同会社OBIを設立。



skyline-TOKYO-(2019)

久野 彩子（日本）

1983年東京都生まれ。2008年武蔵野美術大学工芸工業デザイン科金工専攻卒業、2010年東京芸術大学大学院美術研究科工芸専攻(鑄金)修士課程修了。現在東京在住。主な展覧会に「line」（アートフロントギャラリー/2020）、アペルト11「都市のメタモルフォーゼ」（金沢21世紀美術館 長期インスタレーションルーム/2019）、平成30年度特別展「金属工芸」（金沢市立安江金箔工芸館/2018）など。



108Crosses No.0(2019)

佐藤 貢（日本）

1971年、大阪生まれ。大阪芸術大学美術科中退後、中国よりアジア諸国、アメリカ、中南米諸国などを放浪。1998年、和歌山市へ移住後 漂流物を用いて作家活動を再開。2005年に大阪での個展を皮切りに東京、名古屋などで展覧会を開催。2010年、名古屋に移住。「漂流物を拾ううちに、自分こそが漂流物であることに気がついた。」と佐藤は言う。2014年、2016年、自身の数奇な人生を綴った『旅行記・前編/後編』が出版され話題を呼ぶ。2020年現在、三重県在住。



Dirt Restaurant (2017)
Photo by Kenta Yoshizawa

世界土協会（日本/シンガポール）

世界土協会 World Dirt Association とは、南条嘉毅・James Jack・吉野祥太郎によるアーティストコレクティブであり、特徴ある地質や歴史に焦点を当て世界各地を調査して周り、作品を制作し活動している研究機関です。主な展覧会に「水と土の芸術祭2015」（新潟）、「S.Y.P. Art Space 2016」（東京）、「いちばらアート×ミックス 2017」（千葉）、「Yame Remix 2017」（福岡）、「奥能登国際芸術祭2020+」（石川）などがある。



photo by Shinada Hiromi



《都市のさざめき》2019年

竹中 美幸（日本）

岐阜県生まれ。多摩美術大学美術学部絵画学科油画専攻卒業後、同大学大学院美術研究科修了。東京を拠点に活動。主に透明な素材を用いて制作しており、光や影を取り込んだ平面作品やインスタレーションに展開。主な受賞歴に2020年清流の国ぎふ芸術祭/篠原資明賞、2012年シェル美術賞/島敦彦審査員奨励賞、トーキョーワンダーウォール2010/ワンダーウォール賞など。

※写真は過去の作品です。

第4弾参加アーティストプロフィール（2020年9月25日時点）



水鏡 Water mirror (2018年)
photo by Ooki Jingu

橋本 雅也（日本）

彫刻家。1978年岐阜県生まれ。手を加えることで自然物が内包していたものが表出してくる現象に興味を抱き、独学で創作活動始める。木や動物の角や骨、鉱物や土といった様々な物質を扱いながらも、透徹な視線は一貫して素材やモチーフの奥へと向けられ、形を引き出している。近年、鹿の角、骨を素材とし、身近にある草花をモチーフとした作品で注目を集める。



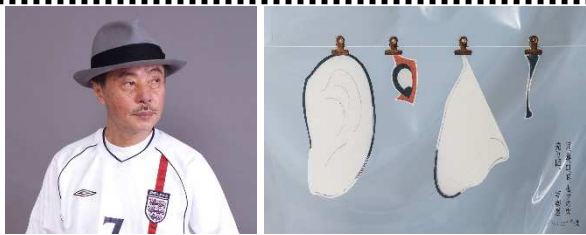
「MOTアニュアル2019 Echo after Echo: 仮の声、新しい影」
展示風景、撮影：森田兼次、2019

三宅 砂織（日本）

2003年ごろより、透明シートに複数のドローイングを描き、印画紙の上に重ね合わせて露光し、ドローイングの影を現像するというフォトグラムの制作を開始。人々の眼差しに時代を超えて内在する「絵画的な像」を多声的に抽出するという試みを展開している。近年の展覧会に2019年「MOTアニュアル2019 Echo after Echo: 仮の声、新しい影」東京都現代美術館(東京)、2018年「第20回DOMANI・明日展」国立新美術館(東京)などがある。

※写真は過去の作品です。

第3弾参加アーティストプロフィール（2020年3月8日時点）



CL: Tokyo Design Week/ P:鈴木薫 Kaoru Suzuki/ 2016

浅葉 克己（日本）

1940年神奈川県生まれ。桑沢デザイン研究所、ライトパブリシティを経て、75年浅葉克己デザイン室を設立。代表作に、サントリー「夢街道」、西武百貨店「おいしい生活」、武田薬品「アリナミンA」、三宅一生のロゴマーク関連など。日本アカデミー賞、東京ADC最高賞、紫綬褒章、旭日小綬章、亀倉雄策賞など受賞多数。東京ADC委員、東京ADC理事長、JAGDA理事、桑沢デザイン研究所10代目所長、東京造形大学客員教授。京大精華大学客員教授。青森大学客員教授。卓球六段。



写真集「EVEREST」(2019)

石川 直樹（日本）

1977年東京生まれ。写真家。東京芸術大学大学院美術研究科博士後期課程修了。辺境から都市まであらゆる場所を旅しながら、作品を発表し続けている。2011年『CORONA』（青土社）により土門拳賞、2020年『まれびと』（小学館）、『EVEREST』（CCCメディアハウス）により日本写真協会賞作家賞を受賞。著書に、開高健ノンフィクション賞を受賞した『最後の冒険家』（集英社）ほか多数。



川はどこへ行った(2000)
撮影:ANZAI

磯辺 行久（日本）

1935年東京生まれ。1950年代から版画を制作し、60年代にはいとワッペン型を反復したレリーフ制作し一躍注目を集める。ワッペンシリーズには大理石を混ぜた石膏でつくった作品のほか、ドローイングやエンボス、プリントなどの作品がある。1965年ニューヨークに渡り、エネルギーなど環境芸術を学び始めてから作風は大きく変換し、バイオや地質や気象など環境を構成している情報と色彩や形といったアートの伝達ツールを重ね合わせた。



work with #6(金沢市民芸術村アート工房空調設備) 2019
photo by tkmorizuru

今尾 拓真（日本）

1992年京都生まれ。京都市立芸術大学で彫刻を学ぶ。2015年より建築のインフラストラクチャーに介入し、場を一時的に読み替える作品「work with」の制作/発表を始める。以後、集団や都市が形成する生態系の中で、環境を身体的に捉えながら、展覧会やライブパフォーマンスの制作/発表を行っている。主な発表として、「OPEN DIAGRAM」(元崇仁小学校/京都/2016)、「so close, yet so far」(芸宿/石川/2017)、「企画(VOID)」(アトリエももさだ/秋田/2019)などがある。



中瀬康志「アートキャバン KAMIKURO」
奥能登国際芸術祭2017

上黒丸（中瀬康志、竹川大介、坂巻正美、宇土ゆかり、土井宏二）（日本）

2012年、美術家・中瀬康志が珠洲市若山町上黒丸地区の廃校を拠点に活動を開始。2014年より坂巻正美（彫刻家）・竹川大介（人類学）が加わり、環日本海文化的視点と現地リサーチによる住民協働プロジェクトを継続して展開。こうした流れを受けて開催となった国際展では「アートのスフィア上黒丸」を掲げ、それぞれが土着的風土を背景に様々な関係を繋げるプロジェクトを実行し評価を得る。今回、現地「上黒丸」をチーム名に全員がワンチームとして結集する。



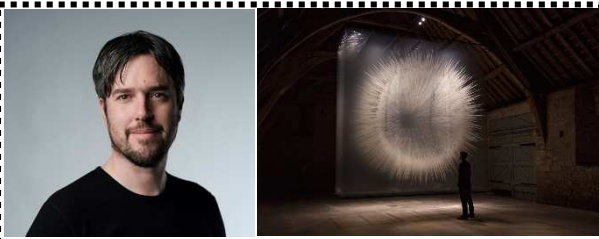
「海と山のスズひらき」奥能登国際芸術祭2017

キジマ真紀（日本）

1976年東京都生まれ。東京芸術大学大学院美術研究科油画専攻修了。布やプラスチック製品などの日用品を手作業によって鮮やかな植物や生き物に変貌させる作品を制作。2009年、2012年、2015年に参加した「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」では地域住民とのワークショップを重ね、住民参加型の作品を展開。2017年の「奥能登国際芸術祭」では海と山の暮らしをテーマに地域の人々が制作したフラッグを旧日置小学校の中庭に展示した。

※写真は過去の作品です。

第3弾参加アーティストプロフィール（2020年3月8日時点）



「Vision II」, 2017

デイヴィッド・スプリグス（カナダ）

1978年イギリス・マンチェスターに生まれ、1992年にカナダに移住。現在はバンクーバーを拠点とする。モントリオールのコンコルディア大学で美術修士号取得。彼の作品は、2次元と3次元の間に存在する。作品を通じて、現象や時空間と動き、色彩、視覚システムと監視、力学のシンボル、形態と認識の結び目を探求する。独自の大規模な3次元のはかなげなインスタレーションで知られている。



「Primal Memory 触生—原初」奥能登国際芸術祭2017
撮影：山本礼

田中 信行（日本）

1959年東京生まれ。東京藝術大学大学院美術研究科修了。金沢市在住。漆の艶めかしい質感から喚起される皮膚感や皮膜性を生かした乾漆による立体作品を制作。漆膜で覆われた作品は、光と周囲の景観を取り込みながらあたかも生命が宿っているかのように空間に存在し、独自の造形世界を提示する。1989年の初個展以来数多くの展覧会で作品を発表し、2003年第14回タカシマヤ文化基金タカシマヤ美術賞、2012年第18回MOA岡田茂吉大賞を受賞。



Shovelers, Parts 1, 2 and 3, 2018-2020.
Single-channel and three-channel video.

カン・タムラ（アメリカ/日本）

1970年、米国デラウェア州ドーバーに生まれる。金沢在住。アーティスト、映像製作者、映像人類学者。アンティオク大学(米国)で映画製作の学士号を取得し、ミュンスター大学(ドイツ)で映像人類学・メディア・ドキュメンタリーの修士号を取得した。主に日本・トルコ・モンゴルで活動し、民族誌映画とアートの交差点となるような実験的なドキュメンタリー映画を制作している。



Wind Shines (Community participated installation with HKPSI)
/ Photo credit: Hong Kong Public Space Initiative

郭達麟【ディラン・カク】（香港）

香港と日本の文化で育ち、カナダ、フィンランドで教育を受けた。デザインと都市研究を専門とする。公園のベンチやトラム、庭園、路地などの公的空間におけるデザイン・プロジェクトを手掛けてきた。街の人々と交流しながら、抱える問題や方向性を把握し、そのニーズに応えるデザインを心掛けている。アールト大学最優秀論文賞、2009年DFA Young Design Talent賞受賞。



「Bu Num Civilisation」, 2013

涂維政【トゥ・ウェイチェン】（台湾）

1969年台湾高雄市生まれ、台南国立芸術大学修士課程修了。オランダ国立美術館(2019)、タイランドビエンナーレ(2018)、英ヴィクトリア&アルバート美術館(2017)、シンガポール美術館(2013)等、国際的な展覧会に参加。自己と制度とのあいだを行き来しながら、彼の作品は考古学的発掘と現代生活を融合する作品を手掛ける。現代的な道具をあしらった、架空の国からの遺物のような作品を通じて、時間の概念についても取り組む。



「シアター・シュメール」奥能登国際芸術祭2017
撮影：木奥恵三

南条 嘉毅（日本）

1977年香川県出身。2002年に東京造形大学研究科を修了後、東京を中心に活動、2016年和歌山へ移住。対象の場所に赴き、その場所の特徴を現在の姿のみではなく、歴史の面からも考察し、現地の土を使い複層的な絵画やインスタレーション等を制作している。2016年以降、土、砂を主要な材料としながら、音と光を加えノスタルジックな空間を通じた劇場型のインスタレーション作品として新たな表現方法を確立。

※写真は過去の作品です。

第3弾参加アーティストプロフィール（2020年3月8日時点）



A BOX / amono project. デザイン: 真喜志奈実

Noto Aemono Project (日本)

海沿いに建つ一軒の製材所に魅せられ、結成されたチーム。沖縄・東京・珠洲に住むデザイナーと職人が手を組み、製材所を舞台に作品を制作します。佇まいに惹かれたことをきっかけに知った、製材所の歴史。地域材の循環という観点から、製材所に貯蔵されていた端材を用いて家具を製作し、海を前に佇む製材所に配置します。そして、家具を媒介とし、山と海、人と暮らしの繋がりを見つめていきます。



The burial
2016 / III Montevideo Biennale, Uruguay. Photo: Irina Raffo

フェルナンド・フォグリノ (ウルグアイ)

1976年ウルグアイ生まれ。モンテビデオ在住。詩人でアーティスト。1994年から2006年までウルグアイ共和国大学建築学部で学ぶ。アーティストとして10年の活動の間、ウルグアイ国内外の50以上の展覧会に参加しており、公立施設や個人のコレクションとしても所蔵されている。ベルリン、パリ、北京、アントファガスタでレジデンス経験がある。2019年に第49回モンテビデオ美術賞受賞。



Anomaly Strolls I. 2018.

ムン・キョンウォン&チョン・ジュンホ (韓国)

二人でのコラボレーションプロジェクトとして、「News from Nowhere」と題した領域横断的な作品制作に焦点を当てている。2012年のドクメンタ13以来、2015年のヴェネチア・ビエンナーレ韓国館ほか、二人でサイトスペシフィックな作品制作に取り組み、韓国国内外で数多くの展覧会に参加している。noon賞(光州ビエンナーレ)、第1回韓国美術家賞(韓国国立現代美術館、SBS基金)、マルチチュードアート賞(マルチチュード基金)受賞。



撮影: 鈴木登志代

速写(2013)

山本 基 (日本)

1966年広島県尾道市生まれ。1995年金沢美術工芸大学卒業。若くしてこの世を去った妻や妹との思い出を忘れないために長年「塩」を用いたインスタレーションを制作。展示後は鑑賞者と共に作品を壊し、塩を海に還すプロジェクトも実施している。主な展覧会にファースト・ステップス / MoMA P. S. 1、21世紀の出会い-共鳴、ここ・から / 金沢21世紀美術館、MOTアニュアル2010: 装飾 / 東京都現代美術館、個展: しろきもりへ等がある。金沢市在住。

※写真は過去の作品です。

第2弾参加アーティストプロフィール（2020年1月31日時点）



『ビュー』

尾花 賢一（日本）

群馬県生まれ。筑波大学芸術研究科洋画専攻修了。人々の営みや、伝承、土地の風景から採取した『マンガ形式のドローイング』を制作。覆面や不穏な空気を纏った人を主人公とした物語を、絵画や立体を織り交ぜながら表現している。展示空間の中に足を踏み入れ、虚構と現が交差しながら物語へと同化していく作品を探求している。



『静かな海流をめぐって 奥能登曼荼羅』奥能登国際芸術祭2017

金沢美術工芸大学 アートプロジェクトチーム [スズプロ]（日本）

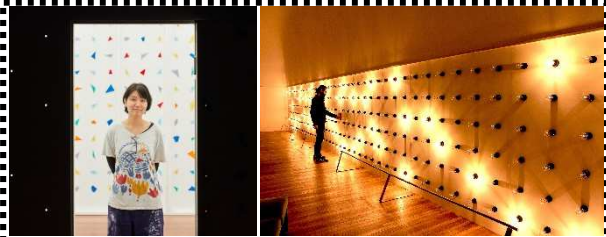
奥能登国際芸術祭を機会に、金沢美術工芸大学の教員と学生が専門の垣根を超えて結成したチーム。日本海と共に発展してきた珠洲の歴史的・社会的背景をふまえ、「静かな海流をめぐって」をテーマに掲げて活動。平成28年4月から本格的にフィールドワークを開始し、環日本海を見渡した調査研究を行いながら、奥能登でしか表現し得ない大規模な作品の制作に向けて日々の活動を続けている。



Lovely Corner

陳思 【チェン・シー】（中国）

1983年、北京生まれ、在住のイラストレーター／アーティスト（別名ビッグ・オレンジ）。「かわいらしさ」をテーマに、現代社会の緊張感と不安感を癒やしをもたらす作品制作を行う。作家のドンドンシャンと絵本を出版し、その展覧会を北京で開催しているほか、映画俳優の陳坤の著書「鬼水瓶録」のためのイラストを手掛ける。



撮影:Duncan Wright

『After light dress - homage to Atsuko Tanaka』2019

中島 伽耶子（日本）

1990年京都出身。2013年、京都精華大学洋画コース修了。2015年、東京藝術大学美術研究科修士課程修了。水や光などを主な素材とし、場所との関わりを出発点に作品を制作。積極的に作品の中に変化を取り入れ、空間と作品が一体となる、緊張感のある場を作り出す。



『川の向こう、舟を呼ぶ声 群衆』2018

中谷 ミチコ（日本）

2010年VOCA展奨励賞受賞、2012年ドレスデン造形芸術大学Meisterschülerstudium修了。一般的なレリーフとは異なり凹凸が反転している立体作品を制作。イメージを粘土で成形し、石膏で型をとる。原型の粘土を取り出し、空の雌型に透明樹脂を流し込む。物体の「不在性」と「実在性」を問い続けている。



撮影:Tomoya Miura

『12島と港の物語 回遊式アニメーション』インスタレーションビュー 2016年

蓮沼 昌宏（日本）

1981年東京生まれ。画家・記録写真家。東京藝術大学大学院美術研究科美術解剖学研究室博士課程修了。現在、愛知県を拠点に活動。イメージの自律性、夢の不思議さに関心を持ち、「キノラ」によるアニメーションを中心に、写真、絵画を制作する。

※写真は過去の作品です。

第2弾参加アーティストプロフィール（2020年1月31日時点）



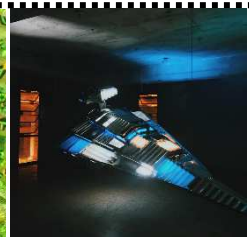
Venerae Architecture, 2014 Photo by Ivan Buljan

クレア・ヒーラー&ショーン・コーデイロ （オーストラリア）

オーストラリア出身。消費社会からこぼれ落ちたものを再構成し、遊びやユーモアの感覚をもちながら美術史的参照をもとに作品制作を行う。既成の構造物に介入し彫刻やインスタレーションを仕上げている。作品には、人々とモノの移動を可能にし、また同時に制限するグローバルなネットワーク、経済システムが反映されている。



撮影:Memo Carcamo



"Heavy Metal Dream Destroyer", 2019
Photos: Sam Portillo

シモン・ヴェガ（エルサルバドル）

1972年エルサルバドル生まれ。メキシコ・ベラクルス大学卒業後、マドリッド・コンプルテンス大学にて修士号取得。ドローイング、オブジェ、インスタレーション、パフォーマンスを制作する。中米で見られる市場や自作建造物、ストリートや海岸にある屋台などからインスピレーションを受けている。彼の彫刻作品は、宇宙開発競争時にNASAとソ連で開発されたカプセルや宇宙ステーションを参照にした第三の世界を作り出す。



アレクサンドル・ポノマリョフ（ロシア）

1957年ドニエプロペトロフスク（旧ソ連、現ウクライナ）出身。1973年にオリョール美術大学を卒業後、1979年にオデッサの海洋工学学校を卒業。ロシア海軍艦隊にて従事するかたわらで海上、北極、グリーンランド、南極で作品制作を行う。ロシア・芸術アカデミー会員、フランス芸術文化勲章受章。



撮影:Kenryou_Gu

《移住を生活する 釜山-金沢》(シングルチャンネルビデオ)より(2018) 撮影:Can Tamura

村上 慧（日本）

1988年、東京生まれ。東京を拠点に活動。2011年武蔵野美術大学造形学部建築学科卒業。2014年より自作した発泡スチロール製の家に住む「移住を生活する」プロジェクトを始める。内省を反転させて社会的なアクションに変換する方法を探っている。著書に『家をせおって歩く』福音館書店(2019)及び『家をせおって歩いた』夕書房(2017)がある。2017年文化庁新進芸術家海外派遣制度によりオレプロ（スウェーデン）に滞在。



Bug report (Terminal) 制作クレジット: ADAGP Keita Mori
撮影:レヴェック・ファンニエル, Courtesy the artist and Galerie Catherine Putman

盛 圭太（日本）

1981年北海道生まれ。多摩美術大学卒業後渡仏。文化庁新進芸術家海外研修員としてフランスパリ国立美術学校に在籍。その後パリ第 VIII 大学大学院美術研究科先端芸術修了。パリを拠点に活動を行っている。2017年フランス初のコンテポラリードローイングに特化したアートセンター、ドローイング・ラボにて、施設のこけら落としとなる個展「Strings(キュレーション:ガエル・シャルボー)」を行った。



「潮流 - ガチャポン 交換器 -」2017年 奥能登国際芸術祭2017

力五山（日本）

2007年「力五山」結成。アートを人々と共生し役立つものとして機能させる事を主目的とした、加藤力、渡辺五大、山崎真一によるアーティストユニット。制作発表する場には、固有の環境があり人々の営みがある。複雑に成り立っている場に対し、広い間口で様々な事柄を取り入れて、色々な表現手段を絡み合わせて「物語」を紡ぎ出す。アートの力で人々を繋ぐ作品を展開している。

※写真は過去の作品です。

第1弾参加アーティストプロフィール (2019年7月31日時点)



青木野枝(日本)

1958年生まれ。東京都出身。多摩美術大学客員教授。従来の彫刻の概念を超えた、新しい自らのスタイルを構築し、現代日本を代表する彫刻家としての地位を確立した。



大岩オスカル(ブラジル)

物語性と社会風刺に満ちた世界観を、力強くキャンバスに表現する油絵画家。独特のユーモアと想像力で、サンパウロ、東京、ニューヨークと居を移しながら制作を続けている。



カールステン・ニコライ(ドイツ)

1965年生まれ。ベルリンを拠点に活動。科学的な根拠にインスパイアを受けながら、グリッドやコード、エラーやランダム構造といった数学的なパターンや自己組織化現象について探求する。



金氏徹平(日本)

1978年京都府生まれ。京都市立芸術大学大学院美術研究科修了。プラスチック製品や雑誌の切り抜き、おもちゃなど身の回りの物を収集し、コラージュ的手法で作品を制作。



カルロス・アマラレス(メキシコ)

1970年メキシコシティ生まれ。サブカルチャー、伝統工芸、ポピュラーカルチャートを組み合わせた画像編集によるコンセプチュアルアートに取り組む。



キムスージャ(韓国)

1957年大邱(テグ)生まれ。音や光、その文化特有の素材を用いながら、パフォーマンスや映像、写真、インスタレーション等多様なメディアで、様々な文化が複雑に重なり合い共存する社会を表現している。



サイモン・スターリング(イギリス)

1967年にサリー州エプソム生まれ。2005年英国で最も活躍する現代美術家に贈られるターナー賞を受賞。綿密な調査をもとに秘められた歴史やエピソードを見つけ出し、膨大なプロセスを内在させた作品に取り組む。



さわひらき(日本/イギリス)

1977年石川県生まれ。ロンドン大学スレード校美術学部彫刻家修士課程修了。心象風景や記憶の中にある感覚といった実体のない領域を、映像・立体・平面作品などで構成されたビデオインスタレーションで表現する。



スポード・グプタ(インド)

1964年インドビハール州カガウルに生まれ。大量生産されたステンレスの道具など、日常的な道具から、移動やグローバリゼーションそして宇宙といった共通の課題を反映させた作品制作を行う。



原広司(日本)

1936年神奈川県生まれ。建築家、東京大学名誉教授。世界の多様な集落の空間形態を調査し、独自の建築理論を展開。2013年に日本建築学会大賞を受賞。



ひびのこづえ(日本)

静岡県生まれ。東京芸術大学美術学部デザイン科卒業。コスチューム・アーティストとして広告、演劇、ダンス、バレエ、映画、テレビなどその発表の場は、多岐にわたる。

※写真は過去の作品です。